

大学英語授業における「宝地図」活用法に関する研究

Research on Integrating “Treasure Map” into a College English Course

濱田 真由美*

Mayumi Hamada

本研究は、夢や目標を可視化する自己実現ツールである「宝地図」¹⁾を、教科内容と言語学習の両方に重きを置く CLIL アプローチを用いて大学英語授業に導入し、夢を描く力、人生に対する考え方、そして英語に対する学習動機に与える影響を 3 年間の取り組みから論じたものである。アンケート結果からは、「宝地図」は夢を描く力や自己肯定感を高める効果があることが示唆された。また英語学習への動機も高まったことが示された。

キーワード：宝地図、キャリア教育、自己実現、CLIL、学習動機

I. はじめに

近年、グローバル化がますます加速しているが、これはインターネットの普及が大きく関係している。総務省「平成 26 年通信利用動向調査」によると、世界のインターネット普及率は 2005 年には 10.2 億人だったのに対し、2014 年には 29.2 億人まで増え、先進国、途上国を問わず世界的に普及が進んでいる²⁾。今や世界のどこにいても、インターネットで世界中の動向を瞬時に知ることができ、あらゆる情報や知識の交換が世界規模で行われるようになった。

日本においても、2014 年末にはインターネット普及率は 82.8% となり、端末別利用状況では、スマートフォンが既に 47.1% まで達している。ネットショッピングも今や国内だけにとどまらず、また、海外からの情報収集や情報交換のツールとして SNS の利用が増える中、インターネットで使用される言語は英語が依然一位であり³⁾、英語が今後ますます必要な言語として使い続けられることに関しては、疑いの余地はないであろう。

一方、我が国が抱える少子高齢化とそれに伴う人口減少問題は日本経済にマイナスの影響を与えており、日本企業は新興市場の拡大などを背景にグローバル事業の展開を加速することを余儀なくされている。こういう状況の中で、ビジネス界においても英語が使え、国際社会で活躍できるグローバル人材の育成は喫緊の課題となっている。

しかし、そういう状況にも関わらず、日本人の英語力は国際的に決して高いとは言えない。2015 年 TOEIC®テスト世界の受験者のアンケート結果によると日本人の平均スコアは 513 点であり、

*流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

46カ国中39位にとどまっているのが現状である⁴⁾。

このような中、文部科学省（以下、文科省）は様々な施策を実施してきた。新学習指導要領に「外国語活動」として小学校5、6年生に年間35単位時間を割り当て、2011年には英語授業を必修化した。また、2013年12月には「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、東京オリンピックが開催される2020年に向け、小・中・高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めようとしている⁵⁾。大学受験においても英語の試験問題は大きく変更され、2020年度からはセンター試験に代わってWriting, Speakingも含めた4技能を評価される新試験が導入される予定である⁶⁾。

2014年10月に公表された「今後の英語教育の改善・充実方策について報告（概要）～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」では、改革を要する背景として、以下のように述べられている。

グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である。アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき。今後の英語教育改革においては、その基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成は重要な課題⁷⁾。

ここで注目すべき点は、英語力だけではなく、英語力を活用して「主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」も掲げられていることである。

これまでの終身雇用制度や年功序列が崩壊し、大企業の倒産もあり得る不安定な時代において、以前のように安定した生活を期待することはできなくなった。2014年には全労働者のうち、パートや派遣など、いわゆる「非正社員」が占める割合が40%にも達している⁸⁾。また、就職活動においても留学生との競争が強いられ、就職後の大学新卒離職率が30%を越えるまでに状況は変化している⁹⁾。

さらに、人工知能（AI）の急速な進化により、これまで人間が担ってきた多くの仕事が、近い将来にはロボットに取って代わられることは容易に予測できるであろう。

昨今、小学校からキャリア教育が導入されている一つの理由に、このような社会環境の変化が大きく影響している¹⁰⁾。夢を描く力や主体的に行動する力を育み、強みや得意分野を生かした仕事を通じて経済的にも自立し、社会に貢献していける人材を育成する必要がある、今後さらに高まってくるであろう。

本研究は、このような時代背景を踏まえ、英語教育にキャリア教育を組み込んだ新しい大学授業の試みに関する研究である。昨今、ヨーロッパを中心に注目を集め、急速に広まりつつあるCLIL（内容言語統合型学習）というアプローチを使い、夢や目標を可視化する自己実現ツールの一つである「宝地図」を大学英語授業に導入し、夢を描く力、人生に対する考え方、そして英語に対

する学習動機に与える影響を検証する。

II. CLIL

CLIL とは Content and Language Integrated Learning (内容言語統合型学習) の略語で、「母語以外の言語を用い、教科内容と言語の両方を学習し教える教育的アプローチ」¹¹⁾のことを言う。教育・学習プロセスにおいて教科内容と言語に同等の重きを置き、両者を統合して科目内容を指導することにより、科目知識、語学力、学習スキルの向上を図るものである。

CLIL という用語は 1994 年にヨーロッパで提唱された比較的新しい概念であるが、近年、盛んに実践され多くの研究がおこなわれているテーマの一つである。この背景には CEFR (Common European Framework of Reference: ヨーロッパ共通参照枠) との深い結びつきが関係している。CEFR とは、欧州評議会 (Council of Europe) によって推進されている、共通の言語能力レベル到達度指標のことであり、語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際標準規格として、急速に西欧諸国に広まっている。日本でも、文科省が 2013 年に発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」に CEFR が導入されており、今後ますます広がっていくことが予想される。

CEFR は元来、ヨーロッパでの複言語主義 (plurilingualism) を実現させるために始まったプロジェクトであり、互いの言語と文化を尊重しつつ自律学習を促す理念に基づく実践的なアプローチとして、CLIL が存在している。

CLIL の特徴は Content、Communication、Cognition、Culture で構成される「4 つの C」と呼ばれる枠組み (Coyle, Hood & Marsh, 2010) である。Content とは取り上げられる教科科目や内容の事を指す。Communication は内容を学ぶ手段としての言語を使用したり、言語を学習することを指す。Cognition とは学習プロセスおよび思考プロセスのことで、CLIL では思考力を高める課題が頻繁に与えられる。Culture は異文化理解を深め国際理解を促進するという広義の意味だけでなく、グループ内や学校内などのコミュニティにおける他者の理解、学び合いや教え合いを通じての協学という、狭義の意味での解釈も含まれている。これら「4 つの C」を用い、教科学習と言語学習を統合している。

和泉・池田・渡部 (2012) は『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第 2 巻実践と応用』の中で CLIL の長所を以下のように挙げている¹²⁾。

- ・中身のある内容やオーセンティックな教材により、学習への動機づけが高まる。
- ・異文化意識が育つことで、国際社会に参加するための英語習得という「統合的動機 (受験勉強のような「道具的動機」に対する概念) が生まれる。
- ・意味のある豊かなインプットが与えられる。
- ・英語を使って学ぶので、インタラクションやアウトプットを行う必然性が生まれる。

- ・聞く・読む・話す・書くを有機的に統合できる。
- ・深い思考を伴うので、言語知識が記憶に定着しやすい。
- ・文字、音声、数字、視覚など多様な知能に訴えるので、さまざまな学習スタイルに適合しやすい。

さらに、CLIL の長所として柔軟性も挙げられる。学生の語学レベルに合わせた使用言語の比率、言語学習と内容学習の比率、CLIL 授業の頻度や回数など、状況に合わせて様々なシラバスデザインが可能であることも、CLIL の長所と言えよう。

日本での CLIL の歴史は西欧諸国よりもさらに浅く、ここ数年で注目を浴びつつある。上智大学が先駆けて 2009 年に CLIL を導入し、その詳細は『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第 1 巻原理と方法』¹³⁾ 及び、『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第 2 巻実践と応用』に報告されている。また、笹島 (2011) は、CLIL 授業の例として、小学生の調理実習、高校での生物授業、埼玉医科大学での健康科学授業などを挙げているが¹⁴⁾、日本での CLIL の取り組みは始まったばかりで、特に大学での実践例は限られているのが現状である。

III. 「宝地図」

「宝地図」とはコルクボードや画用紙などに、自分の夢や目標、欲しいもの、訪れたい場所、将来の理想の姿などをイメージさせる写真や言葉を貼りレイアウトする自己実現、目標達成のためのツールの一つである。「宝地図」の他にも「ドリームマップ^{®15)}」、「ビジョンボード」など呼び方は複数あるが、夢や目標、願望や将来の理想像などを明確にするために、言葉だけではなく写真や画像をレイアウトするという点で共通している。この点が、目標を紙に書いて壁に貼ったり、計画表や手帳を利用するなどの従来の方法とは決定的に違っている点である。



図 1. 学生が作成した宝地図の一例



図 2. 学生が作成した宝地図の一例

宝地図公式サイトでは、「宝地図の 5 大効果」として以下を挙げている¹⁶⁾。

- (1) イメージが明確になり、潜在意識に働きかけることができる。
- (2) 無意識のうちにアイデアが湧く。
- (3) 行動・思考が目標・願望実現志向になる。
- (4) 心の声を聞く。
- (5) セルフ・イメージが高まる。

これらの効果は次の 3 つの視点から説明が可能であろう。

一つ目は右脳と左脳の働きの違いにある。画像や映像などのイメージ情報は右脳が、文字や言葉の認識は左脳が司っており、情報を映像で覚える右脳記憶は、言語による左脳記憶に比べ、処理速度が速く、膨大な量の情報を記憶することができるとされている。例えば、自分の理想の家の外観を言葉で長々と説明するよりも、一枚の写真を見せることで相手にすぐ理解してもらえることからわかるように、画像を使うことで詳細な部分まで、瞬時に明確に表すことができる。夢が叶わない理由の一つに夢が曖昧で明確でないことが挙げられるが、画像を使うことにより、より明確に細部まで落とし込むことができる。

Paivio (1986) の唱えた二重符号化説によると、人間は言語システムと、イメージなどを扱う非言語システムの独立した 2 つの認知システムを用いて情報を処理している。イメージと言葉を比べた場合、イメージの方が長期記憶に残りやすく、イメージと言葉を両方使用するほうが片方だけ使用するよりも効果的である¹⁷⁾。このことより、「宝地図」を使い夢や願望を可視化することは、言葉だけで夢や目標を書くよりも記憶に残りやすく、思い出す頻度も増え、結果的に行動

に繋がる可能性も高まると推測される。

「宝地図」が効果的である第2の理由はプライミング効果と呼ばれるものである。プライミング効果とは先行する刺激（プライマー）の処理が、後の刺激（ターゲット）の処理を促進あるいは抑制させる効果のことで、あらかじめ、ある情報や事柄を見聞きしておくことにより、別の事柄が思い出しやすくなったり覚えやすくなったりする作用のことを言う。連想ゲームの前に果物の話をしていると、「赤いもの」と言われるとリンゴやイチゴを思い出す確率が高くなるのもプライミング効果の一例である。プライミング効果の特徴は潜在的（無意識的）処理が高速で行われることである。

Shantz & Latham (2009) は、写真を使ったプライマーが、資金集めのパフォーマンスにどのような影響を与えるかという研究を行った。マニュアルにランナーがゴールした写真をプライマーとして使用した従業員のグループと使用しなかったグループでは、写真つきのマニュアルを用いた従業員のグループがより多くの資金を集めるという結果が得られた¹⁸⁾。

言葉をプライマーとして使用した Bargh, Gollwitzer, Lee-Chai, Barndollar, & Trotschel (2001) の研究によると、成功、勝利、達成などの語をプライミングされた実験群の参加者は、後続の単語探しパズル課題の遂行が統制群の参加者よりも高まった¹⁹⁾。実験群の参加者は、高いパフォーマンスを動機づけられる言葉をプライミングされたという自覚はなかった。この結果は、外的な環境からの刺激によって動機づけが無自覚に起こり、人間の行動に影響を及ぼすことを示している。このような無自覚に生起する動機は「自動動機」(Auto-motive; Bargh, 1990)²⁰⁾と呼ばれており、プライミング効果の研究は近年、盛んに行われている (Bargh, Chen, & Burrows, 1996; Bargh, Lee-Chai, Barndollar, Gollwitzer, & Trotschel, 2001; Oikawa, 2005)^{21) 22) 23)}。

プライミング効果は、自分自身をプライミングすることにも応用できる。上記の研究結果から、「宝地図」を毎日見ることは自らをプライミングする非常に効果的な方法であると考えられる。「宝地図」に貼ってある夢や目標に関する写真や言葉を見ることで、意識的及び無意識的な影響を受け、「自動動機」が生起する。その結果、必要な情報に自然と注意が向き、アイデアが湧き、意識的な行動だけではなく、本人が自覚しない目標追求行動も喚起され、目標達成の確率が上がると推測される。

「宝地図」の効果を説明する第3の理由はビジュアライゼーションによる影響である。ビジュアライゼーション (visualization) とは、「ある状態や出来事を、頭の中で思い描くこと、イメージすること」であり、スポーツ選手のパフォーマンスを高めるためにイメージトレーニングとして広く利用されている。例えば、Ranganathan, Siemionow, Liu, Sahgal, & Yue (2004) は、小指の力がビジュアライゼーションだけで強化されるかという実験を行った。毎日15分ずつ12週間継続した結果、実際にトレーニングを行ったグループでは筋力が53%アップした。ビジュアライゼーションだけを行ったイメージトレーニングのグループも35%の筋力アップが観察された²⁴⁾。この

ように、ビジュアライゼーションのみで筋肉強化が可能であることも多くの研究により実証されている (Yue & Cole, 1992; Yao, Ranganathan, Allexandre, Siemionow, & Yue, 2013; Shackell & Standing, 2007) ^{25) 26) 27)}。

これは、脳は実際におこっていることと、イメージしていることが区別できないため、Pascual-Leone, Amedi, Fregni, & Merabet (2005) はイメージした時と実際に経験した時には同じように脳回路が発達することを経頭蓋磁気刺激法 (TMS) を用いた研究の中で報告している ²⁸⁾。

ビジュアライゼーションの効果は、体の筋肉だけではなく、気分や考え方にも影響を及ぼす研究結果も報告されている。King (2001) の研究では、大学生に人生の夢が全て叶った理想の人生を想像させ、毎日 20 分間、4 日間続けて最高の自分について書くように指示した。3 週間後に行われたアンケートでは、人生の辛い出来事について書いた参加者に比べると、毎日理想の人生を想像して書いた参加者は、より幸せを感じ、ポジティブで楽観的であるという結果が得られた ²⁹⁾。将来の最高の自分をイメージすることや感謝できることを書き出すことは、健康や幸福度を向上させることに影響している (Lyubomirsky, Dickerhoof, Boehm, & Sheldon, 2011; Seligman, Steen, Park, & Peterson, 2005; Sheldon & Lyubomirsky, 2006) ^{30) 31) 32)}。

実際におこっていることと、イメージしていることが区別できないという脳の特性は、ビジュアライゼーションをセルフイメージ向上のためにも利用できる可能性を示唆している。セルフイメージを高めるためには実際に何度も成功する必要はなく、ビジュアライゼーションを用いて何度も成功したイメージを繰り返すことで、実際に成功した時と同じような効果が期待できる。「宝地図」は夢や目標を既に叶えた自己実現の状態をイメージさせてくれるので、自然とセルフイメージが高まり、夢や目標が身近に感じられるようになると考えられる。

近年、「宝地図」やドリームマップが、キャリア教育の一手法として教育現場に導入される動きも広がっている。

例えば、船橋市立南本町小学校では 2013 年にキャリア教育の一環として 6 年生約 50 人に「宝地図」を作成する特別授業が行われた ³³⁾。船橋市立行田西小学校では、渡邊 (2006) が小学校 5 年生の授業に「7 つの習慣」という成功哲学を 1 年間取り入れ、その中で「宝地図」を導入した。渡邊の取り組みについては『7 つの習慣 小学校実践記 2』の中で詳しく述べられている ³⁴⁾。その他にも、大阪和泉市立緑が丘小学校で「11 才のハローワーク」として総合的な学習の中でのキャリア教育として 1 年間の総まとめとして「宝地図」に取り組んだ事例や、「親子で夢をかなえる宝地図・特別セミナー」、英語専門塾・武蔵ゼミナールでの難関大学合格を目的にした「宝地図」利用などの例が『親子の夢をかなえる「宝地図」』の中で紹介されている ³⁵⁾。

「宝地図」の普及に取り込んでいるヴォルテックス有限会社は「英語・算数・宝地図」という理念を掲げ、2025 年までに 2000 校で「宝地図」の授業の実現に向けて活動をしており、2015 年からは教員向けの無料「宝地図」セミナーも開催している ³⁶⁾。

ドリームマップは一般社団法人ドリームマップ普及協会によって推進されている。2002年に誕生して以来、ドリームマップは主に小・中学校を中心にこれまで広がってきた。「平成27年度学校ドリームマップ授業実戦報告書」によると、2015年度には小学校から大学、専門学校、特別支援学校まで、合計192校で14,175名がドリームマップ授業を受講した³⁷⁾。オリンピック開催の2020年までに「ドリマプロジェクト2020」と題して、世界中で1,000名のドリマ先生³⁸⁾(ドリームマップを進行する講師)の達成を掲げている³⁹⁾。

大学教育現場でも、「宝地図」やドリームマップを取り入れた授業が始まっている。名城大学では、船田(2012)がアメリカ文化研究の一環として「宝地図」を言語学的に解説し「宝地図」をゼミの授業に取り入れている⁴⁰⁾。ドリームマップ講座は、愛知教育大学でキャリアデザインの授業に組み込まれており、その他にも、慶應義塾大学、愛知大学、専修大学、名古屋大学などでもドリームマップ講座が開催されている⁴¹⁾。また、2016年8月1日と2日には、慶應義塾大学SDMヒューマンラボ主催により『「夢と未来を描き可視化する手法」のシンポジウムと体験会〜ドリームマップ、宝地図、ビジョンボード〜』が開催された⁴²⁾。

IV. 研究目的

上述したように、夢や目標を可視化するツールである「宝地図」やドリームマップは日本の学校教育でも普及の兆しを見せているが、研究はまだ始まったばかりで文献は極めて少ない。Takatsuna & Shimizu(2015)の研究によると、ドリームマップが小・中学生のキャリア発達の促進に一定の効果を生むことが明らかになった⁴³⁾。慶應義塾大学SDMヒューマンラボでは現在、ドリームマップ講座実施後の幸福度などを計測する研究が進められている⁴⁴⁾。

しかしながら、CLILを用い「宝地図」を英語教育と結びつけた例はこれまで見当たらない。本研究では、夢や目標を「宝地図」を用いて可視化することにより、夢を描く力を養い、自己肯定感を高め、人生に対して主体的な姿勢を育成するという取り組みを行う。大学英語授業の中でCLILプログラムとして「宝地図」を導入し検証を行うことを目的とし、以下の研究課題を設けた。

1. 「宝地図」は学生の夢を描く力や人生に対する考え方にどのように影響を与えるか？
2. 「宝地図」をCLILプログラムとして英語授業に導入することにより、学生の英語に対する学習動機及び学習意欲が高まるか？

V. 研究方法

1. 参加者

流通科学大学、半期英語選択科目「英語で学ぶ成功哲学」を2012年度から2104年度に受講した学生46名のうち、「宝地図」を作成、発表し、且つアンケートに回答した30名(男性15名、女性15名)のデータを分析対象とした。学生の英語習熟度に関しては、TOEIC®において300点

弱～700点を越える学生まで、かなりの幅があった。

2. 手順

まず、CLILの「4つのC」に沿って90分授業10回分のレッスンをデザインし、教材やワークシートを準備した。

Content — 夢や目標を明確にし、「宝地図」を作成し、口頭発表する。

Communication — 英語を用い、4技能全てを使う課題に取り組む。

Cognition — 夢や目標を明確にするために自分の内面を見つめる質問に答える。

Culture — グループディスカッションや口頭発表を通じてお互いに学び合い、他者理解と自己理解を深める。

学生の夢や目標、興味を引き出すための質問とワークシートを作成する際には、「Be-どういう自分になりたいか?」「Do-どういう体験をしたいか?」「Have-何を所有したいか?」という3つの分野を網羅した。また、学生の英語力にかなりの差があったため、ワークシートは日本語と英語の両方で記述できるように作成し、各学生の能力に応じて、日本語と英語を使用する比率を自由に選択できるように配慮した。

a. 期間（第1週～第6週）

授業中のディスカッションの準備として、学生が自分自身を見つめ内面に注意を向ける時間を十分とれるよう、授業外で取り組む課題を毎週与えた。授業中には、グループやペアで答えを発表、共有させることで、自己開示と他者理解を促すよう試みた。クラスメートから違う意見を聞くことで、他者との違いを認めると同時に、自分の意見も尊重する姿勢を育むことも意図した。また、Facebook（以下、FB）で秘密のグループを作成し、FB上でも一部の課題をシェアさせることによって、知識と情報の共有、クラス内でのコミュニケーションを促進した。以下は、ワークシートで使用した質問の例である。

- ・海外、国内を問わず、訪れたい場所を25か所挙げ、そこに行って何をしたいかを書きなさい。
- ・今、海外で一番訪れたい場所はどこですか？旅行カタログやインターネットで情報を調べ、既にその場所を訪れたという設定で旅行の感想を書きなさい。
- ・小さな夢から大きな夢まで思いつくこと夢を100書き出しなさい。
- ・子供の頃、夢中になっていたことは何ですか？
- ・アラジンの魔法のランプがあり、3つの願い（お金以外）が叶えられるとしたら、何を願う

ますか？

- ・「20年間自由なお金と時間をあげるので、多くの人に役立つこと、喜ばれること、自分が大好きなことをしなさい。」と言われたら、あなたは何をしますか？
- ・あなたが今、感謝できること、感謝している人を思いつくだけ全て書きなさい。
- ・自分自身で得意だと思うことは何ですか？
- ・自分では意識していなかったのに、人から上手だと褒められたことがあることは何ですか？
- ・あなたが憧れる人、尊敬する人は誰ですか？ 3人選び、なぜその人物を尊敬しているのか理由を説明しなさい。
- ・あなたの理想の10年後をイメージし、10年後の自分として自己紹介文を書きなさい。

また、リーディング、リスニング教材として、学生になじみのある、世界で活躍中のスポーツ選手や、ビジネス界で成功している企業家などのコメントやスピーチを用い、「夢を叶えるために何が必要なのか？」「成功している人物はどこが違うのか？」を考えさせ、日本語と英語でディスカッションする機会も設けた。

「宝地図」作成日までに、素材集めとしてカタログやパンフレット、雑誌、インターネットなどから、自分の夢や目標をイメージさせる写真やフレーズ、座右の銘などを集めさせた。

b. 作成（第7週～第8週）

A1サイズ（90cm X 60cm）のコルクボードを使用し、望月（2011）らが示す以下の「宝地図」作成手順に従って授業内で作成を行った（p.42）。

- (1) なりたい自分のキャッチフレーズ&名前を書く。
- (2) 「最高の笑顔」を貼る。
- (3) 夢を表現する写真やイラストを貼る。
- (4) 夢の期限や条件を入れる。
- (5) 具体的にイメージできる写真を貼る。
- (6) 自分自身を勇気付ける言葉を書く。
- (7) 応援してくる人の写真を貼る。

学生は「宝地図」を作成する2週間で、発表用スクリプトを英語で作成する課題にも取り組んだ。英語レベルが低い学生は、事前に配布されたプレゼンテーションの雛形やスクリプト例を参考に、発表用スクリプトを作成した。

c. 英語での発表（第9週～第10週）

「宝地図」作成後、各学生は「宝地図」について約10分間の発表を英語で行った。「宝地図」に貼った夢や目標が既に叶ったという設定で、現在完了形、過去形、現在形、現在進行形を用いて説明をした。発表者以外の学生は、発表をよく聞き、印象に残った部分や素晴らしかった点についてポストイットに2～3のコメントを書き、それをフィードバックとして発表者に渡した。

発表後は「宝地図」を自宅へ持ち帰り、いつも見える場所に置いておくよう指示した。また、自分の「宝地図」を写真に撮り、コンピューターの待ち受け画面やスクリーンセーバー、FBの壁紙などに使うこと、そしてFBやLINEなどのSNSでシェアすることを促した。「宝地図」を見ていて浮かんだアイデアはすぐ実行に移すように説明し、「宝地図」に貼った夢や目標に関して何かが進展があったり実現した場合にはFBで報告することを伝えた。

VI. 結果

2012年度後期から2014年度後期までの3クラスで、各学期の最後にアンケート調査を実施した。アンケートには5段階のリッカート尺度を用い、学生は1（全く同意できない）、2（同意できない）、3（どちらでもない）、4（同意できる）、5（非常に同意できる）の中から、各質問項目に対して最も適している回答を選択した。また、各質問に対して自由記述欄を設け感想を記述してもらった。

全質問項目から「宝地図」作成と「宝地図」の英語発表に関する質問項目のみを抜粋し、以下にグラフで示した。「宝地図」作成についての質問項目の結果が図3と図4である。質問1の「宝地図作成はおもしろかった」については30人中26人が「非常に同意できる」と回答しており、平均値は4.8（5点満点）で、非常に高い結果となった。「宝地図」作成に学生が非常に強い興味を示し、楽しく取り組んだことが示されている。

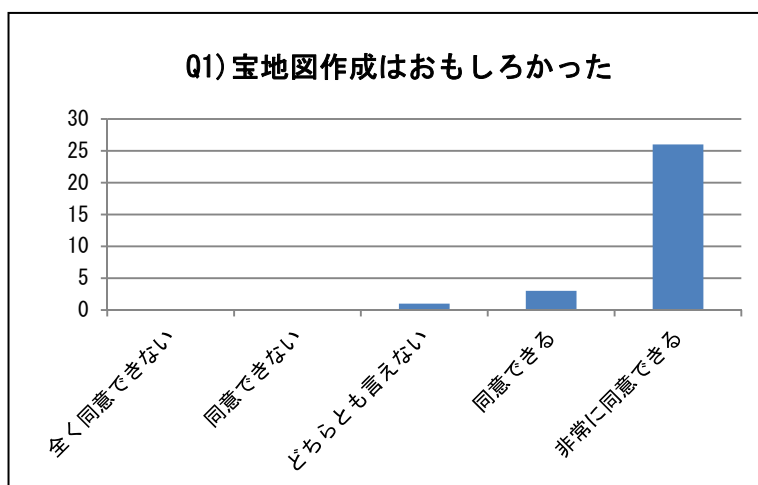


図3. Q1) 宝地図作成はおもしろかった

質問2の「宝地図作成は自分の人生に役立つ」かどうかについての平均値も非常に高く4.7であった。2人を除いた全員が「同意できる」あるいは「非常に同意できる」と回答した。

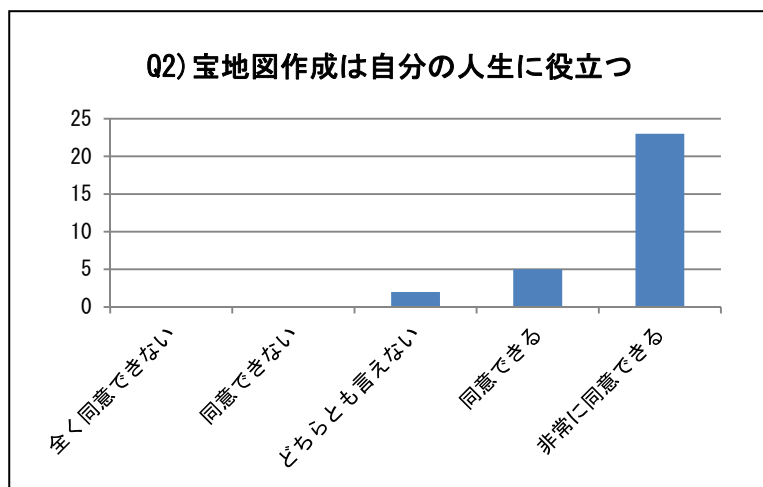


図4. Q2) 宝地図作成は自分の人生に役立つ

「宝地図」作成がなぜおもしろく、どのように人生に役立つと考えているかについては、自由記述欄から以下のようなコメントが得られた。

- ・ワクワクしながら「宝地図」を作成することができ、楽しかった。
- ・今まで「宝地図」を作ったことがなかったが、こんなに楽しくて素晴らしいものだとは思わなかった。
- ・最初は欲しいものがわからなかったが、自分が本当にしたいことや欲しいものが見つかった。
- ・「宝地図」を作っているときに、新しい発見ができ、たくさんの夢を見つけた。
- ・自分にこんなにたくさん夢があるなんて思っていなかった。
- ・本当にワクワクして、子供の時に戻ったような感じがした。
- ・自分の夢を再確認できた。
- ・自分自身について詳しく考える時間を取れてよかった。
- ・好きなように写真や言葉を貼っていく作業がとてもよかった。
- ・今、自分の未来にとってもワクワクしています。
- ・今は自分が何を望んでいるのかがはっきりわかるので、行動することが簡単になった。
- ・夢を叶えるのが以前より簡単だと感じられるようになった。
- ・自分のやりたいことがはっきり見えてドキドキする。夢をわかっていたら頑張れば実現しやすい。

- ・「宝地図」作成中もどんどんやりたいことや叶えたいことが出てきて、ボードに貼りきれないほどになった。
- ・「宝地図」に貼った夢がどのように叶っていくのかワクワクする。
- ・実現に近づける第1歩。夢実現に向けて頑張りたい。
- ・「宝地図」の夢が既にかないつつある。

次に、「宝地図」を英語で発表することについての質問項目の結果を図5～図7に示した。質問3の「英語で宝地図を発表するのは難しかった」については平均値は3.3で、結果にばらつきが見られるのは、学生の英語レベルに差があるためであると推測できる。13人の学生が「同意できる」あるいは「非常に同意できる」と回答しており、約43%の学生が「英語で宝地図を発表することは難しい」と感じていることが示された。英語力の高い一部の学生を除いて、自分の夢を英語で発表することはかなり難しい取り組みであったことがうかがえる。

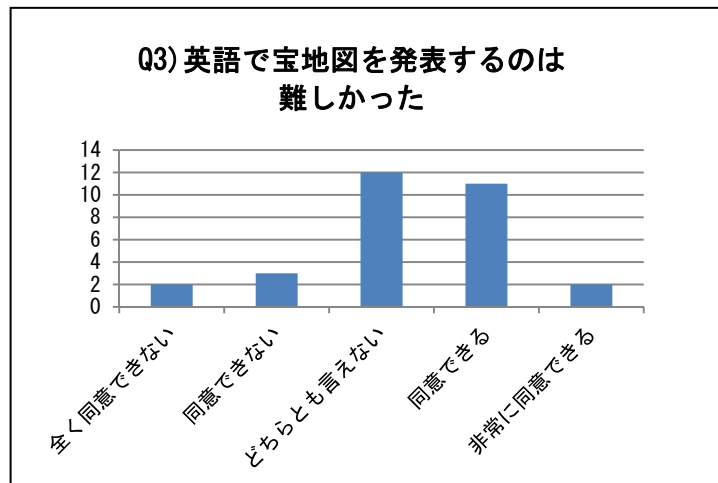


図5. Q3) 英語で宝地図を発表するのは難しかった

質問4の「英語で宝地図を発表するのはおもしろかった」については、83%の学生が「同意できる」あるいは「非常に同意できる」と回答し、平均値は4.5と非常に高かった。また、質問3で「同意できる」あるいは「非常に同意できる」と回答した13人の学生のうち、11人が質問4で「同意できる」あるいは「非常に同意できる」と回答している。これは「宝地図の発表を英語ですることは難しい」と感じている学生の約85%が「宝地図の英語での発表は（難しいにも関わらず）おもしろかった」と評価しているということであり、非常に興味深い結果となった。

「英語で宝地図を発表することは英語学習に役立つ」という質問5に関しては一人以外、全員が「同意できる」あるいは「非常に同意できる」と回答しており、「どちらとも言えない」と回

答した一人の学生も自由記述欄では「緊張しましたがやってよかったです」とコメントを書いたり、好意的に受けとめていることがうかがえる。

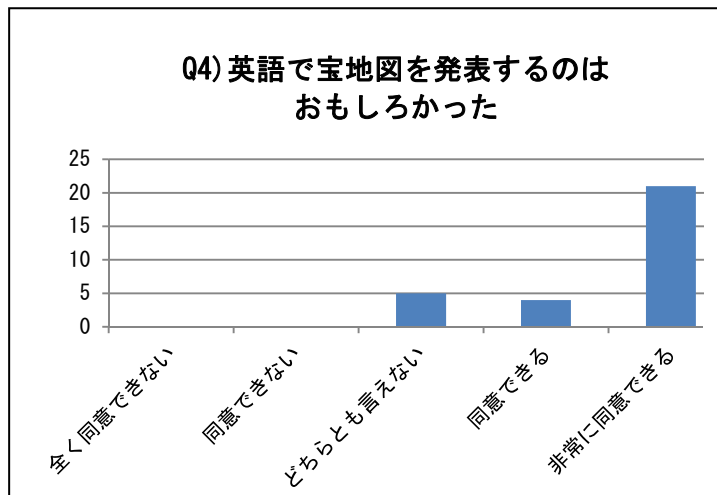


図 6. Q4) 英語で宝地図を発表するのはおもしろかった

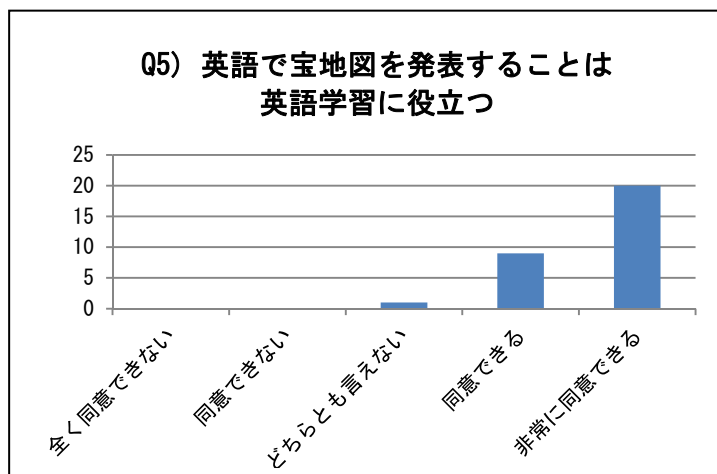


図 7. Q5) 英語で宝地図を発表することは英語学習に役立つ

以下は、学生の自由記述の一部を抜粋したものである。

- ・英語で夢を語るのは難しく緊張したが、とても楽しくワクワクした。
- ・プレゼンテーションの練習を何度したので、達成感があった。
- ・英語の文章を作るのは難しかったが、自分のやりたいことを発表するので楽しくできた。
- ・発表は自分のことを語るだけなので簡単だった。
- ・英単語がわからなくても「宝地図」があったので理解できた。

- ・もっと英語を流暢に話せるようになりたいので、今後さらに英語を熱心に学習していきたい。
- ・英語を勉強するきっかけになった。
- ・英語の勉強になった。これからも発音を含め英語学習を続けたい。
- ・英語での発表は社会に出ても役立つと思う。
- ・日本語の発表の機会もあればさらに自信が持てるかもしれない。
- ・この発表を日本語でするのは恥ずかしすぎてできなかったと思う。英語だからできた。
- ・夢を語る場が少ないが、英語で話すことで話しやすかった。
- ・発表を日本語で考え英語に訳すことで、自分の夢についてさらに理解を深めることができた。
- ・自分の夢をシェアすることでさらに叶いやすくなると思った。
- ・クラスメートから自分の発表についてのコメントをもらえて嬉しかった。
- ・他の人の「宝地図」を見て夢を聞くのがとてもおもしろかった。
- ・発表を聞くことでクラスメートのことを知ることができた。
- ・クラスメートの発表を聞いて、新しい夢が見つかった。
- ・発表を聞いていて、皆やりたいことが違うことがわかった。

VII. 考察

本研究では2つの研究課題を設けた。研究課題1は「宝地図」は学生の夢を描く力や人生に対する考え方にどのように影響を与えるかについてであった。アンケート結果からも明らかなように「宝地図」作成の満足度は極めて高い結果となった。ほとんどの学生が「宝地図」に非常に興味を持ち、準備段階から発表まで一連のプロセスを楽しんで取り組んだことが示された。自由記述欄のコメントからも示されているように、「宝地図」作成プロセスの中で、最初は自分の夢や願望がわからなかったがやりたいことを見つけた学生や、新しい夢を発見した学生が多数見られた。これは「宝地図」の「可視化することで夢や目標のイメージが明確になる」効果を裏付けるものであろう。また、忘れていた子供時代の夢を思い出した学生も多く、「宝地図」作成は昔の記憶を呼び起こす効果があるという可能性も示唆された。

また、「夢を叶えるのが以前より簡単だと感じられるようになった」「頑張れば実現しやすい」「夢実現に向けて頑張りたい」「ワクワクする」などのコメントから推測できることは、「宝地図」は学生の思考や感情、セルフイメージにもプラスの影響を与えていることである。これはビジュアライゼーションの効果を示した King (2001) らの研究とも一致している。受講者の一人は、あるコンテストに向けて、優勝した時に見せるであろう最高の笑顔の写真を先取りして「宝地図」に貼り、実際に見事優勝を成し遂げた。その学生は「毎日宝地図を見て、優勝した時のガッツポーズをイメージしていました」と述べている。このように、「宝地図」作成中及び作成後に自分の理想の姿を何度も見ることで、セルフイメージが高められていると考えることができよう。

さらに、「宝地図」は行動にも影響を及ぼしている。「行動することが簡単になった」「宝地図の夢が既に叶いつつある」というコメントからは、「宝地図」作成後、アンケート実施日までの数週間のうちに実際に行動を起こしている学生がいるということがわかる。実際、「宝地図」に貼った夢が最終授業までに実際に叶った学生も数名おり、1年後に「宝地図」に貼った夢がほとんど叶いました。」と報告に来た学生もいた。また、「宝地図を作った後、しばらく経って忘れた頃に見てみたら、いくつか夢が叶っていたので不思議です」という報告もあり、これは「宝地図」を繰り返し見ることで、意識的な行動だけではなく、「自動動機」(Bargh,1990)による本人が自覚しない目的追求行動が起こっている可能性を裏付けるものと言えよう。

このように「宝地図」は思考、感情、行動全てに好ましい影響を与えたことが推測される。「宝地図」によって夢を描く力や自己肯定感が高まり、人生に対して前向きに取り組もうという姿勢が育まれ、行動に繋がっていくことが示された。

研究課題2は「宝地図」を CLIL プログラムとして英語授業に導入することにより、学生の英語に対する学習動機及び学習意欲が高まるか?についてであった。アンケート結果及び自由記述からまずわかることは、英語レベルに関係なく大多数の学生が英語での発表を非常に好意的に受け止めている点である。また、英語でスクリプトを書くことは多くの学生にとっては難しい課題であったにも関わらず、楽しみながら取り組み、練習を自主的にしたことがうかがえる。これは、教科内容に興味を持つことで手段としての使用する英語にも興味を喚起され、自律学習が促進されるという、CLIL の長所の一つである。

また「宝地図」を英語で発表することにより、学生の英語に対する学習動機や学習意欲が高まったことは、質問2の回答及び「英語を熱心に学習していこうと思う」「これからも英語学習を続けたい」「もっと英語を流暢に話せるようになりたい」などのコメントからも明らかであろう。また、「達成感」という言葉を使った学生が多数いたことから、英語に対する自信を高めたことも推測される。

さらに、クラスメートの発表を聞くことに興味を示し、新しい夢を発見した学生も多く見られ、他者理解を通じて自己発見に繋がっていることも示唆された。

興味深い点としては、「夢を日本語で語るのには恥ずかしいが英語だからできた」と回答した学生が何名もいたことである。文化的背景や日本語と英語の言語的な違いが関係していると思われるが、英語を使うことで心理的ブロックが外れることが示唆されていると言えよう。今後の可能性として、日本語と英語で発表した時の感情や自己開示度の違いを比較・検証するのも興味深い研究になると思われる。

結論として、「宝地図」を使った CLIL アプローチの3年間の取り組みは、和泉(2012)が挙げた CLIL の7つの長所(pp.7-8)をほぼ満たした結果となり、その中でもとりわけ、「中身のある内容やオーセンティックな教材により、学習への動機づけが高まる」「聞く・読む・話す・書くを

有機的に統合できる」「意味のある豊かなインプットが与えられる」「英語を使って学ぶので、インタラクションやアウトプットを行う必然性が生まれる」という4項目が充実したコース内容となった。

VIII. 終わりに

本研究の目的は、夢や目標を可視化する自己実現ツールである「宝地図」を CLIL プログラムとして大学英語授業に導入し、夢を描く力、人生に対する考え方、そして英語に対する学習動機に与える影響を検証することであった。

「宝地図」は夢やゴールを明確化させ、自己肯定感やセルフイメージを高め、自己実現に向けて行動を促す効果があることが示唆された。また「宝地図」を CLIL プログラムとして英語授業に取り入れることで、英語学習への動機や学習意欲だけでなく、英語に対する自信を高める効果もあることが示された。「宝地図」を英語で発表することは英語レベルに関係なく、英語学習に役立つと言えよう。

また、今後取り組むべき課題も何点か明らかになった。本研究では「宝地図」の作成後、数週間間で授業が終了しているため、学生の変化や目標達成へのプロセスについて観察するための十分な時間が取れなかった。「宝地図」作成後、学生が具体的にどのような行動を起こし、夢を実現していくかを追跡調査していくことで、「宝地図」が及ぼす影響をさらに明らかにすることができるであろう。

また、「宝地図」が及ぼす効果をより正確に測るためには、学生の自己肯定感や将来展望など、より詳細な項目を「宝地図」作成の前後で測定・比較するためのアンケート調査の検討が必要である。CLIL プログラムとして「宝地図」を英語授業に組み込み、さらに充実させていくためには、シラバスや教材、また指導法などに関するさらなる検討も必要であろう。

本研究では夢や目標を可視化するための自己実現ツールである「宝地図」と英語学習を組み合わせる試みであったが、CLIL では幅広い教科内容から年齢や目的に応じて自由にカリキュラムをデザインできるため、様々な教育環境で応用できるであろう。教科内容と言語を統合し指導する CLIL には大きな可能性があり、国際社会で活躍できるグローバル人材育成のための有効な教育アプローチとして、日本での今後の広がりが強く期待される。

謝辞

本研究に情報をご提供いただきましたヴォルテックス有限会社の望月俊孝氏、一般社団法人ドリムマップ普及協会、また、本稿の執筆にあたりご助言をいただきました慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科の前野隆司氏、ニューヨークライフバランス研究所の松村亜里氏に心より感謝申し上げます。

引用文献、注

- 1) 「宝地図」はヴォルテックス有限会社の登録商標
- 2) 総務省資料：「平成 26 年通信利用動向調査」2015 年 7 月 17 日記事
http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01tsushin02_02000083.html, 2016 年 8 月 17 日取得
- 3) Internet World Stats: “Internet World Users by Language” http://www.internetworldstats.com/stats7.htm, 2016 年 8 月 17 日取得
- 4) ETS: “2015 Report on Test Takers Worldwide: The TOEIC Listening and Reading Test”
https://www.ets.org/s/toeic/pdf/ww_data_report_unlweb.pdf, 2016 年 8 月 17 日取得
- 5) 文科省資料：「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm, 2016 年 8 月 17 日取得
- 6) 文科省資料：「今後の英語教育の改善・充実方策について報告（概要）～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」2013 年 12 月 13 日記事
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352463.htm, 2016 年 8 月 17 日取得
- 7) 同上
- 8) 厚労省資料：「平成 26 年就業形態の多様化に関する総合実態調査の概況」
http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/keitai/14/, 2016 年 8 月 17 日取得
- 9) 厚労省資料：「新規学卒者の離職状況」2014 年 11 月 7 日記事
http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000062635.html, 2016 年 8 月 17 日取得
- 10) 文科省資料：「キャリア教育推進の手引」2006 年 11 月記事
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/070815/all.pdf, 2016 年 8 月 17 日取得
- 11) Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D.: *CLIL Content and Language Integrated Learning* (Cambridge University Press, Cambridge, 2010), p.1.
- 12) 和泉伸一・池田真・渡部良典：『CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たな挑戦 第 2 巻 実践と応用』（上智大学出版、2011）, p.7.
- 13) 和泉伸一・池田真・渡部良典：『CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たな挑戦 第 1 巻 原理と方法』（上智大学出版、2011）.
- 14) 笹島茂編著：『CLIL 新しい発想の授業』（三修社、2011）、pp.88-129.
- 15) 「ドリームマップ」は一般社団法人ドリームマップ普及協会の登録商標
- 16) 宝地図公式サイト：http://www.takaramap.com/takaramap+index.content_id+4.htm, 2016 年 8 月 17 日取得
- 17) Paivio, A.: *Mental representations: a dual coding approach*. (Oxford University Press, Oxford, 1986) .
- 18) Shantz, A. & Latham G.P.: “An exploratory field experiment of the effect of subconscious and conscious goals on employee performance”, *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 109 (2009) 9-17.
- 19) Bargh, J.A., Gollwitzer, P.M., Lee-Chai, A., Barndollar, K., & Trötschel, R.: “The automated will: nonconscious activation and pursuit of behavioral goals”, *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, No.6 (2001) 1014-1027.
- 20) Bargh, J.A.: “Auto-motives: Preconscious determinants of social interaction”, in E.T. Higgins & R.M. Sorrentino (Ed.), *Handbook of Motivation and Cognition*, vol.2, New York: Guilford Press. pp.93-130 (1990) .
- 21) Bargh, J.A., Chen, M., & Burrows, L.: “Automaticity of social behavior: Direct effects of trait construct and stereotype activation on action”, *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, No.2 (1996) 230-244.

- 22) Bargh, J.A., Lee-Chai, A., Barndollar, K., Gollwitzer, P.M., & Trotschel, R.: “The automated will: Nonconscious activation and pursuit of behavioral goals”, *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, No.6 (2001) 1014-1027.
- 23) 及川昌典:「テスト状況における達成プライミングの効果」、『教育心理学研究』53、(2005) 297-306.
- 24) Ranganathan, V.K., Siemionow, V., Liu, J.Z., Sahgal, V., & Yue, G.H.: “From mental power to muscle power – gaining strength by using the mind”, *Neuropsychologia*, 42, Issue 7 (2004) 944-956.
- 25) Yue, G., & Cole, J.: “Strength increases from the motor program: Comparison of training with maximal voluntary and imagined muscle”, *Journal of Neurophysiology*, 67, No.5 (1992) 1114-1123.
- 26) Yao, W.X., Ranganathan, V.K., Allexandre, D., Siemionow, V., & Yue, G.H.: “Kinesthetic imagery training of forceful muscle contractions increases brain signal and muscle strength”, *Frontiers in Human Science*, 7, Article 561 (2013) 1-6.
- 27) Shackell, E.M., & Standing, L.G.: “Mind over matter: Mental training increases physical strength”, *North American Journal of Personality and Social Psychology*, 9, No.1 (2007) 189-200.
- 28) Pascual-Leone, A., Amedi, A., Fregni, F., & Merabet, L.B.: “The plastic human brain cortex”, *Annual Review of Neuroscience*, vol.28 (2005) 377-401.
- 29) King, L.A.: “The health benefits of writing about life goals”, *Personality and Social Psychology Bulletin*, July(2001) 798-807.
- 30) Lyubomirsk, S., Dickerhoof, R., Boehm, J.K., & Sheldon, K.M.: “Becoming happier takes both a will and a proper way: An experimental longitudinal intervention to boost well-being”, *Emotion*, Vol 11 (2) , April (2011) 391-402.
- 31) Seligman, ME., Steen, TA., Park, N., & Peterson, C.: “Positive psychology progress: Empirical validation of interventions”, *American Psychology*, 60 (2005) 411-421.
- 32) Sheldon, K.M. & Lyubomirsk, S.: “How to increase and sustain positive emotion: The effects of expressing gratitude and visualizing best possible selves”, *Journal of Positive Psychology*, 1 (2) April (2006) 73-82.
- 33) 千葉日報:『夢の実現へ信じる心育む「宝地図」描く』2012年12月4日、p10.
- 34) 渡邊尚久:『7つの習慣 小学校実践記2』(キングベアー出版、2006)、pp.178-189.
- 35) 望月俊孝・梅原伸宏:『親と子の夢をかなえる「宝地図」』(プレジデント社、2011) .
- 36) 宝地図公式サイト: <https://asp.jcity.co.jp/FORM/?UserID=vor&formid=602> , 2016年8月17日取得
- 37) 一般社団法人ドリームマップ普及協会:『平成27年度学校ドリームマップ授業実戦報告書』(2017) .
- 38) 「ドリマ先生」は一般社団法人ドリームマップ普及協会の登録商標
- 39) ドリームマップ普及協会公式サイト: <http://www.dream-map.info/society/media.html> , 2016年8月17日取得
- 40) 船田秀佳:『シンクロマインドの法則 宝地図®への招待』(アルマツト、2012) .
- 41) ドリームマップ普及協会公式サイト: <http://school.dream-map.info/1015> , 2016年8月17日取得
- 42) 慶応義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科:『慶應 SDM ヒューマンラボ主催「夢と未来を描き可視化する手法」のシンポジウムと体験会～ドリームマップ、宝地図、ビジョンボード～』2016年5月18日記事 <http://www.sdm.keio.ac.jp/2016/05/18-090328.html> , 2016年8月17日取得
- 43) Takatsuna, M. & Shimizu, K.: “The research on the effectiveness of career education in elementary and junior high schools: Focusing on comparison of before and after “Dream Map®” making”, Paper session presented at the 2015 conference of International Association for Educational and Vocational Guidance, September 20 (2015) .
- 44) ドリームマップ普及協会公式サイト: <http://school.dream-map.info/312> . 2016年8月17日取得